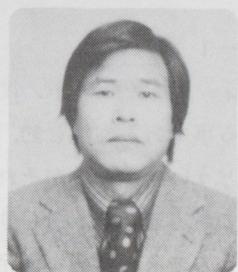


'88, '89

フィッシングボートの開発



マリン本部技術管理部 大下 智

1. フィッシングボート コンセプト

1-1

ヤマハのフィッシングボートの種類も増えてきた。Fボートとしてコンセプトを作り上げた当初は1種類でした。が時代の変化と共に市場のニーズ、多様化に伴って開発の方もUシリーズ、Fシリーズ、FCシリーズとシリーズが出来上がり現在では商品性の差別化によりFを中心に考えた時、
 $UF \xleftarrow[\text{Down}]{\text{グレード差別化}} F \xrightarrow[\text{Up}]{\text{グレード差別化}} FR$ の様にUFシリーズとFRシリーズに目的を絞った開発になった。

デッキデザイン (UF, F, FRの代表艇)

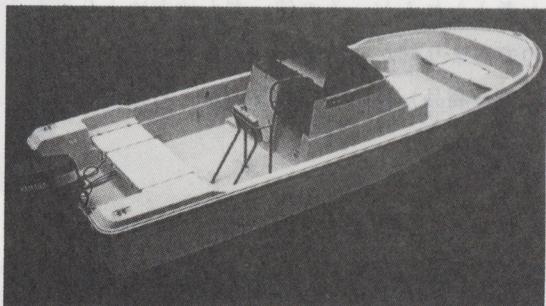


写真1 UFシリーズ UF-23(タックル)



写真2 Fシリーズ F-22



写真3 FRシリーズ FR-27

2. デザインと機能面

2-1

フィッシングポートの開発で大切な事は釣り方を知る事である。流し釣、掛かり釣、引き釣等あるがどういうボートがそれぞれの釣りに向いているかである流し釣、掛け釣ではボートを停止させ使うのでその機能を満足させなくてはならない。例えばゆれない（ゆれにくい）ボート、風に流されにくいボート、安定の良い事である。又引き釣りでは走りながら使われる所以凌波性、走行性能が良いボートである事。国内では大体上記3通りが考えられるが、その使い方も地方により異なるのであまり細かい所造作込まない方が（全国的に売る商品）良いのではないかと考えている。

2-2

フィッシングポートのデザインを開発スタッフがどのように進めているか少し紹介する。一般的には釣人の気持を考え、又自分が使用する時の動

作を考える。例えばここに何があれば便利か、又女性もこの船を使う事を考慮し、トイレは独立の部屋にした方が良いとか、休憩所、着替え場所を使るとか現在のボートはキャビン付が主流である。国内の市場ニーズとして定着して来た。他に持物はどの程度あるか、どのように収納するかを考える。機能面でいえば竿釣を主体に考えるか、手釣を考えるか、何人で使えるか（定員とはちがう）、舷（フリーボード）の高さは適当か、自動排水を考えられているか、デッキウォッシュ（海上で水洗い出来る）は取付けられているか、イケスの大きさ位置は良いか、水位が保たれ水替わりが良いか（スカッパーの数、オーバーフローの機構が大切）、ホイールハウスでは機器類（漁探ロラン）が必要分格納設置出来るスペースがあるか。勿論デザイン面でバランスのとれた見やすい場所で形も良くまとめられている事が必要である。等々検討しながらレイアウト、スタイリングを決めて行く。その他各シリーズの特徴、グレードを加味して行く。

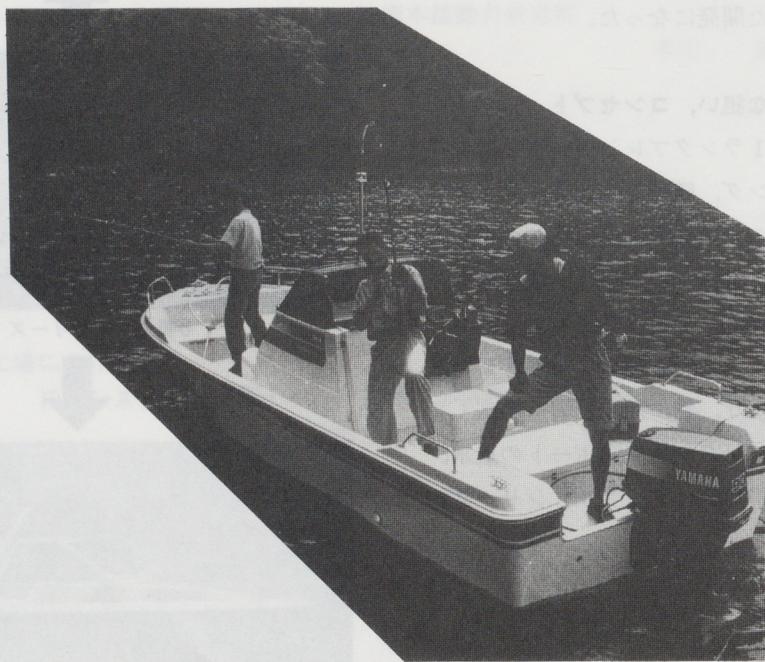


写真4 UF-23 (タックル) フリー ボード

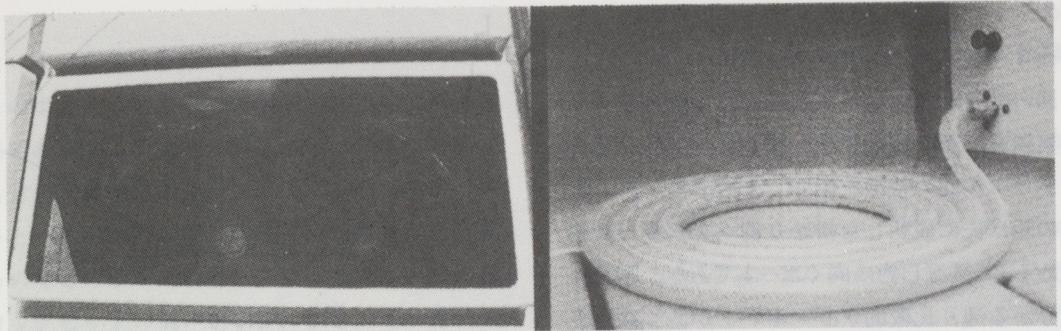


写真5 FR-27 イケス, デッキウォッシュ

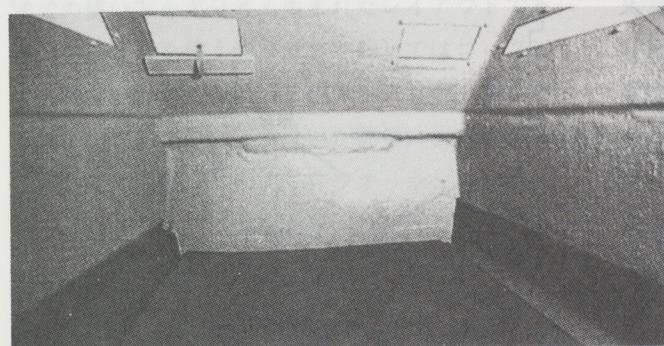


写真6 UF-23 キャビン

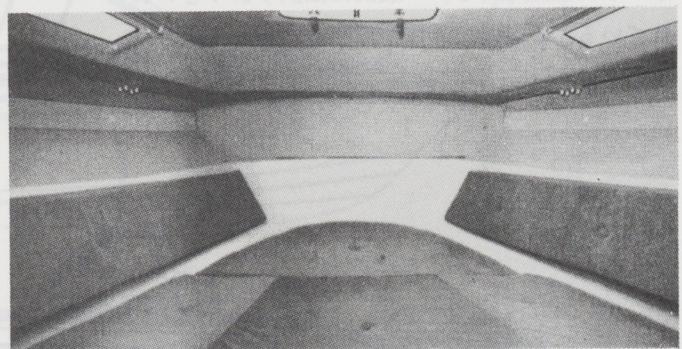


写真7 FR-25 キャビン

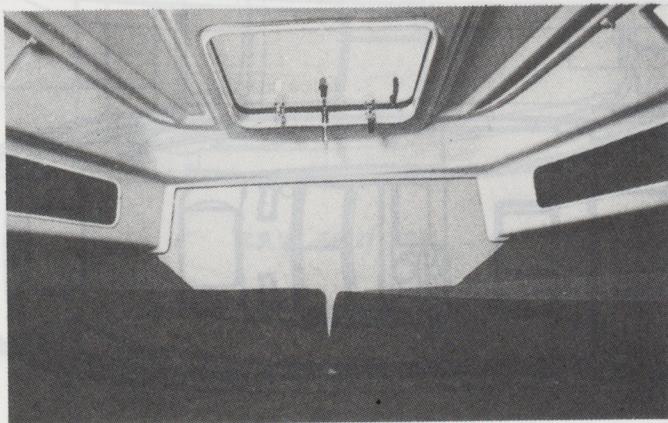
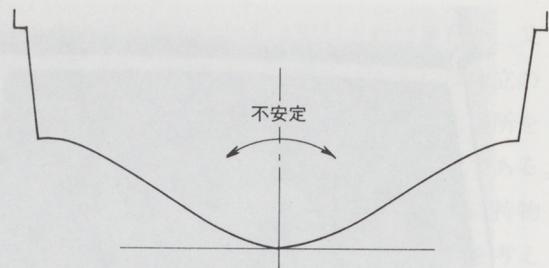


写真8 FR-27 キャビン

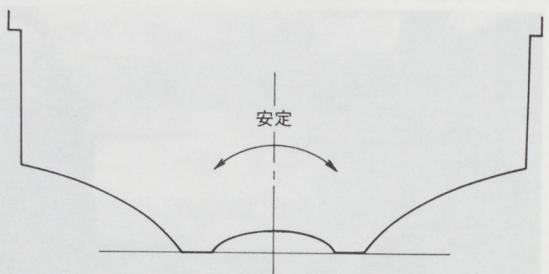
2-3 UF-23 (タックル23)

今回の受賞対象になったと思われる商品であり、販売実績も初年度1000隻を上回るヒット商品である。タックル23の特徴を紹介します。

この船は先に説明した掛け釣（アンカーで船を止める）、又流し釣に向くポートである。**写真4**でも分かる通り比較的フリーボードが低く設定されています。外洋での波の静かな時などは一番使い易いポートである。横安定も非常に良く、又釣スペースもセンターコンソール（キャビン付）でありポートの廻り全て釣スペースであるので多人数が竿を出す事が出来る。キャビン付であり2人が休む事が出来るスペースである。イケスもオプション艤装により前後2ヶ所に装備されている。フロアーは勿論セルフベーリングであり釣マニアにはこれほどピッタリした釣ポートは他社にはないと思う。もう一つの特徴は和船で採用されているボトム形状である。一般的には浜ずわりといわれている。干潮時に船体が傾かないよう工夫されている。



FRシリーズ



タックルシリーズ

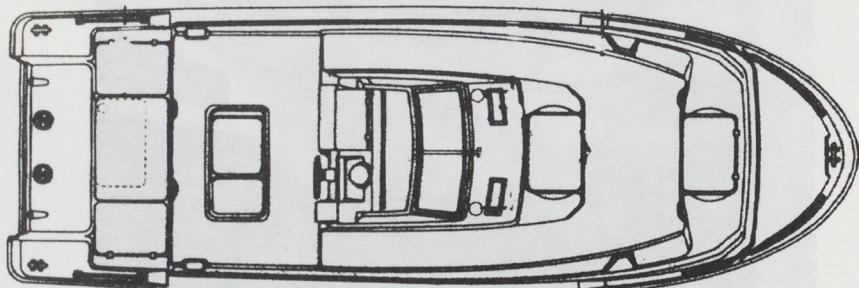
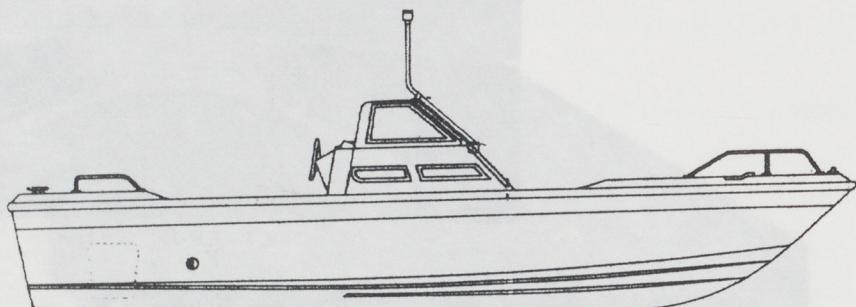


写真9 タックル23 図面

2-4 FR-27

このボートも初年度販売計画を大巾に上廻った商品である。この所25~27フィートのボートは他社も含め一番種類が多い。市場でも使い易い大きさという声が聞かれる。外洋、内海共に充分使えるのでこのようにいわれていると思う。特に後部コックピットの使い易さ、広さ、イケスの大きさ(少し深さがある)、コーミングの高さ等、外洋での使い方を充分考え生まれたレイアウトである。又こませを使う釣(サビキ釣)ではコックピット内をいつでもきれいに出来るようデッキウォッシュを標準装備し、水洗いが簡単に出来るよう工夫されている。このデッキウォッシュはヤマハフィッシングボートがいち早く採用した装置であ

る。又キャビン内もフィッシングボートであるがFRのコンセプトであるグレードの高い仕様にまとめてある。シンプルなレイアウトであり、従来のFシリーズをより一層豪華に作り上げたのがFRシリーズである。

又、搭載エンジンですが、タイムリーにボルボ社から200psディーゼルスタンドライブが発売となり、船とのマッチングもすばらしく、トータルな意味で、まったく新しいフィッシングクルーザーが提供できました。

とにかく ①新しい、高級感のあるデザイン
②新しい、グレードのフィッシングボート ③新しいE/Gとのセッティング ④新しい、フィッシングゲレンデへの挑戦 により、市場から評価されたのではないか。

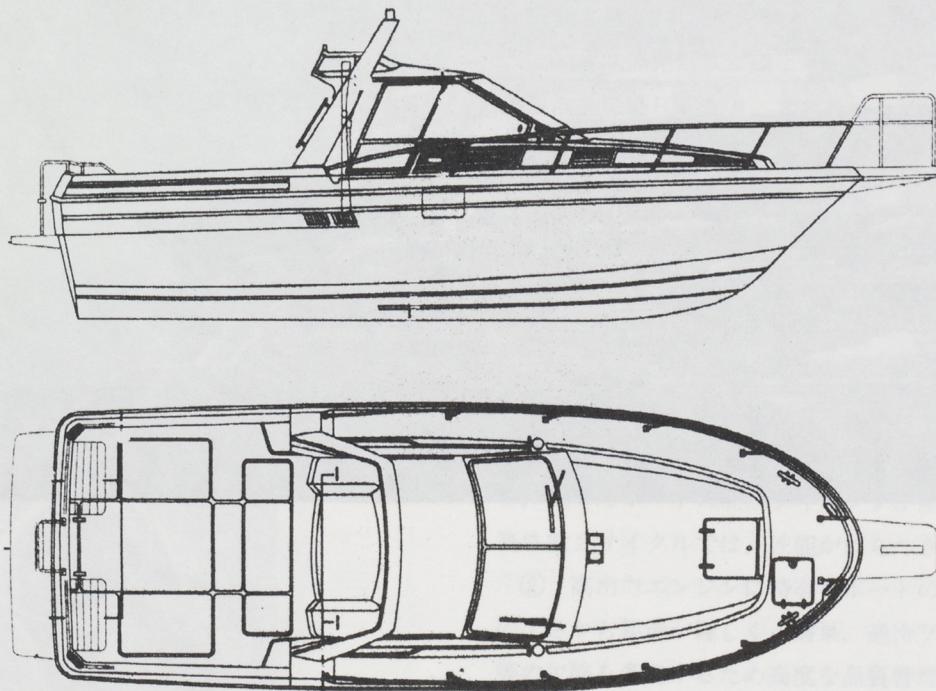


写真10 FR-27 図面

3. まとめ

以上、フィッシングボートの開発の考え方の一部を御紹介したわけですが、欧米に比べ、日本は、やはりこのフィッシングを中心としたボートの使い方が、圧倒的に多く、当社での販売数も70%以上がこのフィッシングボートです。言わば、マリンの主力商品。

日本独特なこの傾向は、日本では当分の間続く

事が予測されます。

又、最近の業界では主力他社が、当社のフィッシングボートをほとんどデットコピーに近い形で発売してきています。“とにかく、ヤマハと同じフィッシングボートさえ作っていれば間違いない”と言った傾向が、特にひどくなっています。せっかく新しいコンセプトでのラインナップ形勢が出来たと思ったら、1年でものまねされると言った事態です。

